

論争の果てに石を拾って投げつけようとしたユダヤ人らを神殿に残し、イエスは門（おそらく美しの門）を潜って外に出て行こうとされた。するとそこに生まれつき盲目の人が座っているのをご覧になった。師が足を止めたので、弟子達も立ち止まり、師の視線の向かう方に視線を合わせた。「先生、彼が盲目に生まれついたのは誰が罪を犯したからですか。この人ですか、それともその両親ですか」と弟子達は尋ねた。

人が被る負の現実の原因をその人の罪や落ち度に結びつける思考パターン（因果応報的思考）は、当時の社会（いや、今でも）において一般的であった。勿論、あらゆる経験を通して（順境の時も逆境の時も）、自らの歩みを振り返り、祈りの姿勢を正し、信仰の領域を押し広げて行く営みは尊く、恵みの特権ですらある。しかし、その場合に求められるのは神への信頼である。神の深いご愛と約束への誠実さへの信頼を失った状態で、自分の、そして他者の置かれている現実を見つめるなら、そこからは何も良いものは生まれて来ない。摂理の神の全きご主権を見上げずに、今ある苦しみや悲しみだけを見つめることは危険であり、自己憐憫の罠に捕らえられて行くことを許してしまう。またその発想の背後には、「人間のなすわざによって、報いるだけの神」という浅はかな神学が露呈している。人は神のさばきを被らないようにと身をすくめるように緊張しながら生きることになる。それは、決して父なる神が、ご自分の愛する子供らに求めている生き方ではないことをイエスは示された。

そのとき、弟子たちは弱さを担ってそこに在る人の過去に目を凝らしたが、イエスは寧ろ前を向いておられた。やがて、その人を通し、その人の人生を通し、その人の弱さを通して、神の素晴らしきみわざが表わされてゆく将来をしっかりと見つめられた。

これまで自分の人生に嫌気を指し、自分の人生、自分の過去を呪うことしかできなかった人が、イエスとの出会いを通して、優れて豊かな意味をもつ幸いな人生へと招かれているのである。それこそ、イエスが世においでくださったご目的であり、福音である。神は私たちの人生を（特に、いま弱さを経験し、足りなさを痛感するあなたの人生を）、ご自分の栄光の現れの場に作り替えようとしていてくださることを決して忘れてはならない。